

# 無意識に「エコライフ」をするのが 真の「エコライフ」



久野 武

Takeshi Hisano

関西学院大学総合政策学部  
教授



真名子 敦司

Atsushi Manago

大阪ガス エネルギー・文化研究所  
所長

低迷が続いた我が国の経済にもやっと薄日がさしてきた。そうした中でも、高度経済成長期に築かれた「大量生産・大量消費・大量廃棄」の価値観を捨てられず、より一層、物質的な豊かさにはがみつく人々が多い。だがその一方で、ものの価値よりも、心の価値を求める傾向も見られるようになってきており、そうした動きが、本誌でもこれまで取り上げてきた「スローライフ」や「ロングライフ」といった流れを生み出している。

また、地球温暖化問題に代表されるように、地球規模での環境変化を感じることも多くなった現在、生活者レベルで自分のライフスタイルを見直す人たちが、いわゆる「エコライフ」と呼ばれる地球環境に配慮した生き方を実践し、大量消費・大量廃棄という価値観を見直すように浸透し拡散すると同時に、その本質を見失ってしまう可能性があるが、「エコライフ」もその例外ではなく、本来の役割を見失っているケースも見受けられるように感じる。

今回は、当エネルギー・文化研究所所長の真名子敦司が、かつて厚生省（当時）と環境庁（当時）で自然保護行政と環境行政に携わってこれられ、現在は関西学院大学で環境政策論の教鞭を執られている久野武教授をお迎えし、現代の「エコライフ」が持つ誤った視点も含めて、『現代における「エコライフ」のあり方』をテーマにお話をうかがった。

## 現代的な「エコライフ」を求めて

真名子 久野先生が昨年一月から連載されているEICネットの「H教授の環境行政時評」はとてもユニークな構成ですが、分りやすくいいですね(URL: [http://www.eic.or.jp/library/prof\\_h/](http://www.eic.or.jp/library/prof_h/))。

久野 あれは、国立環境研究所の環境情報案内・交流サイト(Environmental Information & Communication Network)通称「EICネット」から依頼を受け、Aさんという女子学生との対話を通して自分の考えを述べたものです。おかげさまでなかなかの好評をいただいているようです。

真名子 時にはH教授が面白い意見も述べられるのに、サラリと受け答えをされたりするAさんは、随分、勉強家の学生さんのようですね。

久野 さあ、どうでしょうか。実は彼女はこの学生がいればいいなあと考えて私が創造した架空の人物かもしれませんよ(笑)。

真名子 ところで今回、本誌は特集テーマとして「エコライフ」を取り上げています。

久野 自然を大切にしたい生き方である「エコライフ」を実践しよう

としている人は、確かに増えているように思いますね。

真名子 私は昔の暮らし方のいいところを見直しながら、そこに新しい技術を加えることで、現代的な「エコライフ」を生み出すことができていると思っています。

久野 確かに、そのとおりだと思います。「エコライフ」的な生き方といえば江戸時代などはまさにそうでしたから、昔の生活がよかった「昔の生活を取り戻そう」と言いたくなる気持ちは分かりますが、今更、冷蔵庫も洗濯機もない生活に戻ることはできません。

真名子 実は大阪ガスでは、二一世紀の都市型集合住宅のあり方を提案するこ



EICネット 提供：独立行政法人国立環境研究所  
運用：(財)環境情報普及センター  
H教授の環境行政時評(第1講 その1)

とを目的に実験集合住宅「NEXT21」(1)を建設し、社員による居住実験を行っているのですがご存じですか。

久野 名前は聞いたことがありますが、あいにく拝見したことはありません。

真名子 大阪市内の地下鉄「谷町六丁目」駅の近くにありまして、六階建ての集合住宅で総戸数は一八戸です。あの辺は最近、マスコミなどで長屋再生が話題になっている空堀から続く昔からの住宅地ですから、街の景観や雰囲気にも配慮したデザインになっています。

久野 実験はいつから行われているのですか。

真名子 「フェーズ」を五年単位として、フェーズごとに実験の目的を設定し、それに合わせて設備と部屋をリニューアルし、居住者も変えて居住実験を行ってきました。最初の「第一フェーズ」では、平成六年四月から平成一一年三月までの五年間、社員一六家族が実際に居住して、ゆとりある生活と省エネルギー・環境保全の両立」をテーマとする様々な実験を行いました。そして、引き続き「第二フェーズ」では、平成一二年四月から来年の三月までの予定で、別の一六家族で実験を行ってきました。

久野 実際に社員が住んでいるというのが面白いですね。入居者はどのようにして募集したのですか。

真名子 「このようなライフスタイルの家族を募集している」とコンセプトを明示して応募を募り、その中から最も適していると思われる家族を選んでいきます。実際に生活することで、頭で考えたことと、現実のギャップがあることがよく分かり、その結果は、各方面から非常に注目を集めています。

久野 練りに練った計画でも、現実になると予想もしないことが起こるのは、現実社会においてはよくあることです。から、実際にやってみようというのは大切なことだと思います。なかなかできないことですが。

真名子 「第二フェーズ」では、「地球環境と人の暮らしへの配慮」がテーマです。都心部における自然と共生する生活が課題の一つになっています。実は「NEXT21」は、都心部のヒートアイランド現象を解消するため、建設当初から中庭をはじめ、屋上、各階テラス、外構などに、計一〇〇〇平方メートルの緑地を確保していました。特に中庭は、エコロジカルガーデン」と名付け、当初は人が立ち入らないようにしていましたが、樹木を植えてから一〇年を越えていることもあり、うっそうとした森のような状態になっていました。

「第二フェーズ」では、この「エコロジカルガーデン」をはじめ、敷地内の緑を、今回は入居者自らが運営・維持・管理してきました。

久野 いきなり広い緑地の管理を、しかも複数の家族で協力しながら、というのは大変でしょうね。

真名子 良好な住環境は、そこに住む住民が愛着を持ち、積極的に関わることによって育まれます。今回は入居前に、緑地を含め、快適な住環境を作り、維持していくためにはどうすればよいかについて居住者が話し合う機会をもちました。それでも入居してしばらくは手探りの状態だとまどいもあつたようですが、専門家のアドバイスなどもあり、居住者の意識の上では、緑地が管理する対象から花や野菜を植えるなど活用し楽しむ対象へと変わっていったようです。居住者の話では、結構楽しかったようです（笑）。

久野 しかし、都心部に緑を蘇らせ、その自然と共生していくというのは、現代的な「エコライフ」といえますね。

真名子 「NEXT21」では、生ゴミの堆肥化や雨水の利用などもしていますから、まさに二一世紀における「エコライフ」の一つの姿だと思っています。

久野 話だけでも面白そうですね。今度、是非見学に行かせてください。

真名子 よろこんでご案内いたします。

## 生活者の生理を変える必要がある

真名子 ところで、久野先生は長年にわたって自然保護行政や環境行政に携わってこられました。ご在任中にわが国の環境問題が歴史的に大きな変化を遂げました。生活者とのかわりという点から、環境問題の変遷について少しお話をうかがいたいですか。

久野 私が子供時代を過ごした昭和三〇年代は、夏は家のドアや窓を開けっ放しにして暑さをしのいでいました。また、冷蔵庫も電話もありませんでした。冬は、炭や薪などを使って暖をとっていたのですが、こうしたライフスタイル

は昭和四〇年代にかけて、わずか一〇年の間に「アツ」という間に変わってしまいました。

真名子 私も覚えています。昭和三〇年代から四〇年代に、いわゆる高度成長期にライフスタイルがみるみる変わっていききました。当時はいろいろな電化製品や車を手に入れて、快適な暮らしを実現することが目標でしたし、それが単純に「いいこと」だとも思っていました。

久野 昭和四〇年に入ると、テレビ・冷蔵庫・洗濯機、いわゆる「三種の神器」が揃いました。しかし、そうした急成長の陰の部分が公害問題として現れてきたわけです。

真名子 生活が豊かになるのに反して、公害問題が深刻化していったわけですね。

久野 なぜ我々が豊かになれたかというと、一つの解は「エネルギー消費がどう変わったかを見れば分かります。高度成長とともにエネルギー消費は急拡大しました。エネルギーを使った分だけ生活が豊かになった。そして、その急激な成長の陰の部分が、大気汚染や水質汚濁などの公害問題として顕在化したわけです。

真名子 当時は、3Eつまり経済成長とエネルギー供給、環境保全の調和というより、経済優先の考え方が優勢でしたからね。

久野 一九七〇年前後は、公害もそれなりに対応すればおさまりました。しかし、それで問題は解決したわけではなく、身近に自然がなくなってきたり、地球規模での環境の変化が起こったりして、病は確実に進み、もはや対症療法ではどうしようもない状況になってしまったのが現代だといえます。それが病理だったから薬や手術で治るわけですが、手遅れに近い。

真名子 自動車や家電製品などの省エネは進んでいるはずなのに、依然として運輸用や民生用のエネルギー消費は右肩上がりが増えて続けています。

久野 例えば、車で考えるとエネルギー効率は非常に高くなって排気ガスもきれいになっている。しかし、車の台数が増えているために、全体として見ると環境負荷は減っていないわけです。では、誰が犯人かというと、我々自身つまり生活者になるわけです。こうなると病理ではなく、生理としての環境問題になります。人間でも、生理は基本的に薬では治らないので、良くするには

日々の努力や鍛錬しかない。まさに『環境生理』になっており、生活者一人ひとりの努力や鍛錬が必要だと思っています。

真名子 生活者の自覚と反省が必要になっているわけですね。

久野 役所はライフスタイルを見直せといいます。しかしその前に、『ライフスタイルを見直した方が楽しい』とか『得になる』というシステムを提案することが、行政の役割だと思いますが、それを実行することはとても難しいことです。

真名子 経済産業省は、規制や政策で産業界をリードすることによって省エネルギー対策や環境対策を講じてきました。私たちのまわりには、燃費の良い自動車も環境にやさしい商品も増えています。しかし結局は、生活者がそれを選択しなければ状況は改善されません。まずは、生活者の意識が変わらないことには生理も変わらないということですね。

久野 確かに、生活者の意識を変えないといけません。同時にシステムも変えないといけません。どちらか片方だけではだめですね。

## ものを長く使えるシステムづくりを

真名子 最近是一般の方でも、環境に対する意識はかなり高くなっているように思います。商品を購入する際に、環境に配慮した商品かどうかをどの程度考慮するかについて、あるアンケート調査の結果によると、価格や品質・性能に関係なく環境に配慮した商品を買う人と多少品質が劣っていても環境に良いものを買うという人とを合わせると、全体の四割くらいいます。

久野 確かに、生活者の行動パターンは変わってはきていますね。

真名子 しかし、環境に対する意識が高まっているように思いますが、それが明確に行動に現れているかという点、実際にはまだまだ少なく、大きな流れにはなっていないというのが現状ではないでしょうか。

久野 例えば、車の燃費はかなり良くなってきましたから、毎年、新しい車に買い換えることが環境にやさしいかとなると、これは違います。車を造るためにかかった環境への負荷を考慮すれば、今保有している車を乗り続ける方

が環境にはいいかもしれないわけです。

真名子 家電製品でも省エネタイプがいろいろ出てきています。しかし、エアコンや冷蔵庫などを耐用年数まで使っているかという点、実際には、使用期間は非常に短い。これは、壊れたから修理しようとする修理代が高いということもあります。ですので、つい新しいものを買ってしまう。

久野 少し前まで量販店での保証期間は一年間でした。ところが昔から、少しお金を払えば五年間に保証期間がのびるというシステムがあったのですが、特に宣伝はしていませんでした。しかし最近では、五年間保証にしたらどうですか」と勧められるようになりました。世の中の動きは変わってきていることを実感しましたね。ですから、これからはメーカーも長もちする製品を作り、アフターフォローもきちんとしていくことが求められていると思います。



真名子 そうなりますと、生活者にはますます賢い選択が求められますね。ところで、アメリカは大量消費の代名詞のように言われますけど、そう言われながらも感心する点もあります。意外にも、ものを大事に使う人が多いのです。ガレージセールと称して、引越した時に不要になった中古の家電製品、家具、衣類などを

販売することは日常的なことです。アメリカの家は木造が多いですが、平均的な寿命は日本よりも二倍以上長く、しかも中古住宅のマーケットが日本より大きい。その背景には、リフォームしやすいシステムができてきていることがあります。またアメリカのスーパーでもものを買った、必ずレジ袋をくれるかというところではなく、頼まない袋を出してこないところもたくさんあります。また、全てのプラスチック製品には、使われている材質に応じたコード番号が付けられていて、かなり細かく分別回収されています。リサイクル利用がかなり進んでいるように思います。

久野 ヨーロッパもやっていますね。日本でも廃棄物になる最後までメーカーが責任を持つという体制にすればいい。しかし今は、最後の処理は市町村の責任だ、というシステムになってしまっています。

## 「エコライフ」は、楽しくなければ持続しない

久野 最近、「エコライフ」が話題になりつつあります。本当に「エコライフ」を実践している人は環境にやさしいとか、特に意識していないと思いますよ。この方が楽しい好きだからやっているとか、決して義務でやっていないと思います。

真名子 最近は一昔前と違って、企業では環境と経済が両立するということが理解されるようになりましたね。生活者にとっても同じようなことがあるのではないのでしょうか。省エネ製品を使ったり、省エネ努力をしたりすれば、光熱費は安くなります。また、何かを犠牲にして「エコライフ」をする、というのはなく、生活を楽しむもつとしてやったことが結果として「エコライフ」になっている。今、DIYが流行っていますが、自分が汗水を流して手がけたものには愛着が湧きますよね。こうした行動が相乗効果を生みだし、ものを大事にするようになると思うのですが。

久野 確かに、ものづくりといった趣味を持つことは、環境問題や「エコライフ」へ自然に向きあう機会になるので、いいことです。

真名子 「エコライフ」を実践するためには、意識して自分のライフスタイルを変えないといけない部分もあるように思います。私たちの生活全般が環境に影響していますから、生活の意識・行動・時間・空間の全てについて環境との共生を意識して、生活様式を変える必要があります。しかし、意識と行動がなかなか結びつきにくいのも確かで、その乖離をどう結び付けるかが課題だと思います。

久野 私の親父の世代は、否応なく環境共生をしていましたよね。それは辛いこともあったでしょうが、楽しいこともあったはずですよ。ですので、その楽しい分だけでも、我々は追体験するようにすればいいのではないのでしょうか。

真名子 それが環境教育の本質ではないでしょうか。

久野 私の持論ですが、文明のパロメーターは、下水道の整備や都市の中にある公園、土木工事の量では測れないと思います。有名な話で、一九世紀に入る頃までパリには尿尿を処理する下水道はなく、夜のうちに道路路上に投げ捨てら

れるもので、街の道路は臭くてしやうがなかったそうです。ですから仕方なく行政が整備したものなのに、「すばらしいパリの下水道」といわれ、文明のパロメーターになってしまっている。

真名子 江戸時代に欧米人が日本を訪れると、日本の都市が清潔だったので非常にびっくりしていたらしいですね。堆肥まで無駄にしない、完璧に完成した循環型社会ができていたからです。しかし、こうした伝統的なシステムがあるのに、欧米の文化に憧れてしまったわけです。

久野 近代文明に対する劣等感からそうなってしまった。日本人は極端ですから。そういった意味で、「エコライフ」という考え方も、下手をすると「環境ファシズム」になってしまふ可能性がある。そうなると困ってしまいます。

真名子 何事もバランスが必要ですね。今は、学校教育でも環境教育が重視されているようです。たとえば、九〇年代からは、小・中・高の家庭科教育で男女生徒がともに「よりよい暮らし方」を学んでいます。一昔前までは女子生徒だけが料理、裁縫を学んでいた場で、男女生徒がともに環境に配慮した暮らし方を勉強するようになってきています。

久野 冷静に振り返ってみて、昭和三〇年代の暮らしは今の暮らしと、そう大差はないわけです。まして昭和五〇年代になると、住まいなどもほとんど変わらない。ではその当時のエネルギー消費量はというと、今の四分の一の程度だったわけです。それを知らないから、今のエネルギーを四分の一に減らす、という、江戸時代に戻るような感覚に思ってしまう。そんな昔に戻るわけではなく、テレビ・冷蔵庫・洗濯機がちゃんとあった時代なのです。そういったことを、環境教育の場でキッチンと教えていく必要があるでしょうね。

## 「経済」と「環境」は同じ語源から生まれた

真名子 省エネの対策で脚光を浴びているものに、『ESCO』<sup>2</sup>があります。ホテルや病院などのエネルギーを多く使用している施設を、エネルギー

のフロアが診断して設備機器の改修などを行い、省エネを実現するサービス会社のことです。お客さんのメリットを確実に生み出し、省エネによるランニングコスト削減を保証する。それと同じようなことを家庭でもやれるようにすれば効果があると思います。ただし、ビジネスとして成り立つのは難しいでしょうからそういうことが相談できる仕組みがあればいいと思うのですが。

久野 収入の中から新たな電化製品を買うよりも、知識や教養を身につけることが、これからの生き方であるという意識を、社会全体が持つようにならないといけません。消費税は、今は一律に五パーセントですが、環境にいいものは消費税を不要にするとか、思い切った施策を考えないといけないのではないのでしょうか。

真名子 アメリカでは地域によって消費税が違いますが、ものによっても違います。私がかつて住んでいたコネチカット州の町では、生活必需的な衣料や食品の消費税はタダでした。しかし、贅沢品には消費税がかけられていた。環境と経済の両立のために、そういうやり方もひとつの方法として効果的かなと思います。

久野 その分、税金が減るなら、別のところで徴収すればいいですね。

## 久野 武 (ひさの・たけし)

関西学院大学総合政策学部教授

1967年京都大学卒業。同年4月に厚生省(当時)入省。71年7月の環境庁(当時)発足により環境庁勤務。レンジャーとして、瀬戸内海・中部山岳・霧島屋久などの各国立公園の管理に従事。また本庁では、水質規制課長、国立環境研究所主任研究企画官、環境研修センター所長、ハワイ東西センター客員研究員などを経て現職。

## 真名子 敦司 (まなご・あつし)

大阪ガス エネルギー・文化研究所 所長

1973年京都大学工学研究科修士課程修了後、大阪ガス株式会社入社。78年米国スタンフォード大学修士課程修了。営業部門、総合研究所、企画部、国際部、生産部に在籍。93年～96年ニューヨーク事務所長。99年～2003年国際室長、海外事業室長。03年より現職。専門は、エネルギーと環境。



真名子 「エコライフ」はエコロジカルライフの略で、もともと「エコロジー」という言葉は、ギリシャ語の「オイコス」が語源だそうで、家という意味です。実は「エコノミー」も同じ語源です。つまり環境と経済は同じ語源から生まれた言葉だということになるわけで、その原点に戻って、経済と環境が両立できる社会を築き、できるだけ環境負荷をかけない豊かな生活、エコロジカルでエコノミカルな「エコライフ」が国民全体に浸透すればと思います。

久野 先述のように、真の「エコライフ」は、楽しんで自然にやるもののはずです。ですから、そのためには、「エコライフ」が、『自然に楽しく』できるような社会づくりをしなければいけませんね。

真名子 結論が出たところで、今日はお忙しいところ、いろいろと貴重なご意見をいただき、誠にありがとうございました。

(1) 二世紀の都市での環境エネルギー・くらしはどのようにあるべきか?をテーマに、平成五年一〇月、大阪府中央区に竣工した大阪ガスの実験集合住宅「五ノ丁」を参照。

(2) エネルギーサービスカンパニーの略で、工場やビルなどの省エネルギーに関する包括的なサービスを提供し、それまでの環境を損なうことなく省エネルギーを実現し、さらにはその結果得られる省エネルギー効果を保証する事業のこと。

CEL